

『特養ホーム入居者のホンネ・家族のホンネ』

本間郁子・著

さとう よしこ
佐藤 芳子

最近医療の現場ではインフォームトコンセント (informed consent) と行って病院に受診したり、入院し検査、手術、その他治療を受ける場合、必ず患者に十分な説明と同意が必要となる。これは安全性、危険性、適応性、合併症などをくわしく医療者が説明しその上治療を受けるか否か患者が選ぶわけである。又患者のカルテは医療者側の秘密のようにされ、患者自身が見る事が出来なかったが、最近はまだ一部の医療機関ではあるが見る事が出来るようになってきている。したがって患者は弱い立場ではなく、言いたい事を自由に言える時代になってきている。

特養ホームの場合、病院とは性質も異なるので同じようには考えられない点もあるが、病院も特養ホームでもお世話になることでは同じである。しかしお世話になっていると思うと、利用者やその家族はどうしても言いたい事が言えないのが現状である。

ある特養ホームでは入居者の声を聞くために毎月「入居者集会」を開いて職員が入居者に意見や不満などを尋ねても、お年寄りは「特にありません、満足しています」とにこやかに答える。しかしこれは実は先程までは山ほどの不満を激しい口調で並べていた人達の答である。著者がボランティアの立場でお年寄りや家族に耳を傾けたところ「お世話になっているのだから不満は言えない、家族が介護に限界を感じて入れてもらったのだから、入れてもらっただけでありがたい、文句など言ったら意地悪されてしまう」などの声がきかれるとの事である。

家族が特養ホームに対し負い目や遠慮、不安を感じる事なく職員に対して希望や意見を素直に言える関係にならなければ、特養ホームはお年寄りを最もよい状況で支えることは出来ない、という思いからお年寄りとその家族の声をじっくり聞いてみたい、そしてその

声が特養ホームが人間らしく暮らせる場に生まれ変わっていく力に変えて行きたい、その立場から著者は北海道から九州まで全国の特養ホームの入居者100人と家族100人の聞き取り調査を行ったまさに利用者と家族の「ホンネ」が書かれている。第一部が入居者の声、第二部が家族の声と大変な時間と労力を使って聞き取り調査を行い特養ホームで暮らしている人達の飾らぬ思いと願い、そしてその家族の声が一つ一つありのまま記録されている。いずれ誰もが向かい会う老後に対し、人に支えられて老いを生きるという事がどうゆう事なのかなど教えてくれる本でもある。現在働いている施設の職員、これから特養ホームを利用される人、又学生として実習する場合などにも必見の書である。

(本学人間福祉学科助教授)

『特養ホーム入居者のホンネ・家族のホンネ』あけび書房 1997年

著者：本間郁子（お茶の水女子大学非常勤講師）

A 5判167頁、1,600円